

夕焼ドロップス

written by NAKABA

spinoff from

ナイン・ストーリーズ

-球児九人夏物語-

夕焼ドロップス ــــــــー 川上晴夫

セックスが終わった後、男って生き物は滑稽だ。

身もだえするほどやり場のなかった熱が途端に冷めて、何とも言えない虚脱感と、その場の雰囲気とはかけ離れた場違いな思考が頭をよぎったりする。たとえば今晚の夕飯はハンバーグにしようかな？ とか、テレビから流れて来るニュースの天気予報が気になったりする。ネットで便利な言葉を見つけた。そんな状態のことをスーパー賢者タイムというそう。俗世を捨てた賢者や仙人のように性的なものに対して興味がなくなる時間。冷めた性欲の果て。乱れたシーツの上に残るものがあるとすれば、それは自分がセックス相手のことをどう思っているのか.....そんな単純で簡潔なものだろう。

昼下がりに。情事を終えて、さっさと下の処理をはじめた宗匡の広く健康的な背中をぼんやりと見つめながら、まさにスーパー賢者タイム突入中だな、コイツ.....と川上は思った。自分も男だから、相手の気持ちに手が取るようにわかってしまう。

レースのカーテンを通して差し込む日に目を細め、彼の汗ばむ背中をまどろむように見ていたら、勝手に言葉が口をついた。

「宗匡はさ、もう俺と付き合っちゃえばよくない？」

川上の言葉に一瞬、宗匡の動きが止まった。アパートの路地裏を駆ける子供の声が遠ざかって行く。返事の代わりに、ぽんとタオルが顔に降って来た。息が詰まって、うっとうめき声が漏れた。外国製の柔軟剤、その甘ったるいアロマが鼻の奥に広がる。宗匡の面倒臭そうな声だけが、タオル越しに聞こえて来た。

「だから、それは無理だよ。俺、源太が好きだから」

これまでも冗談めかして、何度か同じことを聞いた。付き合っちゃえばよくない？ と。そのたびに同じ答えが返って来る。俺は源太が好きだから――。

タオルを払いのけ慥然と顔を上げると、手首のスナップを利かせて丸めたティッシュをゴミ箱に投げ込む宗匡の姿があった。そのまま力尽きたようにして、ベッドに倒れ込んで来る。重みで安物のフレームがギシギシと音を立てた。答えは最初からわかっていたが、にべもない態度に少しムツとした。

「でもさあ、もう高校野球もおわっちゃうわけじゃん？ これからは愛しの源太くんとも離ればなれになるわけで」

肩をすくめ、わざと痛いところをついてやる。

「うるせえよ」

ぞんざいな口調だ。出会った当初は、年上の川上に対して敬語だったが、「タメ口でいいよ。堅くなるしいから」と言ったのをきっかけに、次第に砕けた物言いをするようになった。相手の要求に合わせて、自然と振舞うことが出来るのも、この男の魅力だと感じる。だが今の宗匡の言葉には覇気がなかった。動揺をしているのだ。

「そんなの……、わかってんだよ」

力のない呟き。枕に押しあてた顔をずらしてこちらに向けられた宗匡の視線に、川上は気が付かないふりをした。視線を感じながら、ただ茫然と天井を見上げる。ときおり宗匡はこうして川上の顔を見つめることがある。川上の顔は源太という男に似ているのだと――。

大学四年生の川上と道ならぬ関係が続ける高校生、吉田宗匡（よしだ むねまさ）は、実際の歳よりずいぶんと大人びているように感じられた。高校三年にはとても思えない。川上は自分のことを品行方正、清廉潔白などと思ったこともないが、宗匡の取る態度は、宗匡以外にも不特定多数の者と関係を持つ川上よりはるかに割り切っているように感じられた。身体だけの関係だとハッキリと伝わって来る。宗匡と出会ってしばらく経つが、一緒に飯を食おうとか、どこかに遊びに行こうとか、そんな話になったことは一度もなかった。本能の赴くまま川上のアパートでセックスをするだけ。こちらから何か別のことに誘おうとしても、思わず出しかけた言葉を飲み込んでしまう。人を遠ざける気配を吉田宗匡は全身にまとっていた。人に執着心を抱かせない距離感を心得ていて、そのどこか冷めた態度もまたこの男の美点なのかもしれない。

――それなのに。愛しの源太の事となると、途端にその冷静さを欠いてしまう。

小宮山源太。宗匡の片想い中の相手だ。小学生でリトルチーム、中学生では同じボーイズチームに所属して、二人はずっと一緒に野球を続けて来た。高校でも共に甲子園を目指したという。源太と共に最強の二遊間であること、ただそれだけに奉げた青春。甲子園への夢は大輪の花火と同じに散ってしまったが、源太への想いはいまだ冷める気配はない。決して叶わぬ親友への恋。異性が恋愛対象である、ストレートの男を相手に身を焦がし続けるなんて、考えただけでもげんなりとしてしまう。

川上の太腿に残る古傷がじくりと痛んだ。側面に走る傷痕をさりげなく手のひらで押さえる。自身の暗い記憶に引きずり込まれそうになり、意識して声のトーンを上げた。

「いっそのことさあ、もっと色々な男と遊んで、憂さ晴らしすればいいんじゃないの。宗匡、モテまくりよ？ 日に焼けてがっちりした高校球児なんてもう、完全にブランドじゃん。俺だったら、それを最大限に活かすけどなあ。いいなあ」

宗匡がそんなことを望んでいないと知っている。だが自分のために言わずにいられなかった。いい加減うんざりした表情を見て、川上は慌てて口をつぐんだ。

「いいんだよ。そういうのはもう、間に合ってるし」

「俺がいればいいってこと？」

返答はない。我ながら面倒臭い奴だと思った。

部屋を満たす気だるい午後の光。宗匡が嫌がるのでエアコンを止めていた。扇風機が首を振るたびに、ぬるい風が肌の上を撫でて行く。宗匡はそれ以上問いかけに答える様子も見せず、眠そうにしてそっと瞼を閉じてしまった。すぐにすやすやと寝息が聞こえて来る。

無防備な寝顔をさらす宗匡にやれやれと息をついた。射精をした後に眠くなるのも男の生理現象なのだという。セックスをするだけして眠くなれば全裸のままでも寝てしまう。そんな宗匡から抑えきれない若さを感じるのだった。

スーパー賢者タイムか――。

山奥の仙人が常に俗世を気にすることなくいられるのなら、そんな生活もいいのかもしれない。何者にも振り回されず、ただ自分が生きることだけに専念が出来るのなら……。いや、そんな生活は自分には無理だなあ。と川上は自嘲する。こんなことを考えはじめるなんて相当の重症だと、再びため息が出た。蹴散らしてあったタオルケットを腰の辺りまでたぐり寄せた。

はあ、やだな。もう後戻りできないじゃん。俺はコイツのことが……宗匡のことが本気で好きなんだ――。

改めて宗匡の寝顔に目を向け、川上はそう自覚した。

川上はどこか源太に似ている。吉田宗匡はそう言う。手入れをしてもすぐ太くなってしまいう眉。低い鼻に丸っこい顔の輪郭。女にモテることはないだろう垢ぬけない顔つきだ。身長だって高くもないし、寸詰まりな体型だと思う。鏡に映る冴えない自分へ、険しい視線を向けてみる。笑ってみる。口をへの字に曲げてみる。くしゃっと破顔させた笑顔。この表情が一番、源太に似ていると宗匡は言う。鏡の中の自分が虚ろな瞳をしている――。

たぶん初めて会ったときから、川上は宗匡のことが好きだった。同性愛者向けのウェブアプリケーションでつながり、ぼんやりとピントのズレた写メで宗匡の顔を認識しているつもりだったのだが、実際に会う彼は川上が思っていた以上に精悍な顔立ちだった。ずんぐりむっくりな自分とは似ても似つかない。スポーツをしている男子学生特有の夏の日差しのような青々しさがあつた。思わず触れてみたくなる顎のライン。浅黒い肌に厚くはった唇。若さに潤んだ瞳。目の淵から伸びる長い睫毛。そしてどこかほの暗い翳りを漂わせていた。その翳りの正体を川上は知っていた。ストレートの男を好きになってしまった者がつくる陰影だ。恋心を一方的に諦めようとする気持ちと、そのくせ抱いてしまうほのかな期待。叶わぬ恋に身をやつし、深い海の底から、はるか海面の光を見上げている。この先ずっとひとりで生きて行くのだろうと、自分の人生すら覚悟した者の翳りだ。

それは高校の頃に川上が歩いていた暗がり、実は一緒だった。歩き方に慣れただけで、今だって同じような足元の覚つかない道を歩いているのだが、そのことに川上自身は気が付いていない。例えば、暗い夜道に恐れをなして、「ある日～森のなか～クマさんに～」とわざと明るい鼻歌で気を紛らわせている。それが今の川上だった。

駅から離れたさびれた喫茶店。そこまでの道中もずっと辺りをキョロキョロと気にして、ここならばまず知り合いに遭遇することもないだろうと、ようやく気を許した宗匡に「あの……俺、そういう人に会うのはじめてで」と言われて、さすがの川上もすぐに手を出すのは憚られた。源太という同級生への恋心をとつとつと語られ、もちろん下心はあつただけけれど、自分の高校三年間を思い出したのだった。故郷で過ごした日々、自分の初恋のことを――。

川上は長野の山間の町に生まれ育つた。ほそぼそとした林業と、ひのき細工の工芸品、そんなものしかない静かな町だった。高校の三年間、野球部のキャプテンその同級生の男がただただ好きだった。彼の笑顔を見られれば一日幸せでいられた。山肌に降り積もつた雪の輝き。早朝、かじかむ手に息をあてながら白銀の世界が日の光に染まっていく景色を美しいと感じた。人を好きになって初めて、世界はこんなに美しい輝きに満ちているのだと気が付いた。その輝きは今の川

上には眩し過ぎる。忘れていた眩しさだった。騒りの中でときおり、宗匡が閃かせる光と同じ。川上にはもう二度と手の届かない真っすぐさだった。

高校を卒業し、片想いの同級生から逃がれるようにして、東京の大学へ進学をした。このまま彼のそばに居続けたら気がおかしくなってしまうと思ったからだ。彼は地元の林業組合への就職が決まっていた。

忘れたい一心で手を出した出会い系ネットツール。川上が住んでいた長野の田舎では考えられないほど、東京は同じ性的指向を持つもので溢れていた。出会おうと思えばいくらでも男はいた。初めての男とリアルに会ったとき、自分も宗匡のように片想いの同級生のことを語ったような気がする。初対面の者を相手に、他に何を話したらよいのかわからなかった。相手の男は、これからやろうとする年下の大学生が、訛り混じりに語ったそんな話をどういう気持ちで聞いていたのだろうか。

会う者出会う者と片っ端から関係を持った。見ず知らずの男と肌を重ねるたびに、自分は誰かに必要とされているのだと安心をすることが出来た。だが一方で、何か自分がの中から消えて行くのも感じていた。いったい何が消えて行くのか。深く考えることを避け、明るい鼻歌を口ずさみ続けた。

東京での刺激的な生活も三年目を迎えようとする春。故郷の訛りを誤魔化すことにもようやく慣れた頃、風の便りが舞い込んだ。川上の好きだった男と卒業前から彼と付き合っていた元野球部のマネージャーが結婚をする。その知らせだった。元よりお似合いの二人だった。誰もが認めるカップル。覚悟をしていたはずだった。もうどうでもいいはずだったのに、本当はちっともどうでもよくないことを思い知らされた。だが何もかも遅かった。見ず知らずの男と肌を重ねるたびに消えて行ったものは、諦めや恋心などではなく、ただあの日の純真さだった。ただ寂しさを埋めるために、東京での奔放な生活を続けてしまった自分は、昔のように密やかに大切な人のことを思うことすらもう許されない。許されないのだろうと感じた。

そんな初恋の相手を滲ませるのが吉田宗匡だった。川上は源太に似ている。だが宗匡の方こそ、その容姿の端々に川上の好きだった同級生の影が滲んでいたのだ。記憶の中だけの面影。川上がつい年下の男ばかりに目が行ってしまうのは、もしかしたら好きだった男のいつかの面影を、あの日のままの姿を、他の誰かに探しているのかもしれない。

最初に喫茶店で初恋の相手に似ていると思ったときから、川上は宗匡のことが好きだった。だが自分でも気が付かないまま身体の関係を追った。そうすることが同級生への恋を諦め、嘘をつかなくていい正直な人生であろうと願った川上にとって自然なものだった。



「せんばーい、川上先輩！」

大学の学食に、緊張感のない声が響き渡る。学食の窓から見える常緑樹が日の光に輝いていた。川上は声のした方を見ずとも、その主が誰であるのかがわかり、イラっとした気持ちがわき上がった。面倒な奴に夏休み明け早々に見つかってしまった。

残暑厳しく、食堂の古臭くバカでかいクーラーが耳障りな音を立てながらフル稼働をしている。昼飯を食うにはまだ少し早く、だだっぴろい学食には数人の学生がぽつりぽつりといるばかりで、駆け寄って来た男のでかい声がよく響いた。

「うお、先輩、今日は魚すか。ヘルシーだなあ。おれは肉かな。トンカツか……や、魚はムニエルだし。どっちがいいすかね？」

隣りに並んだ男は、銀色に磨かれたカウンターに陳列された定食の皿を前に暢気な声を上げた。川上の丸顔と男の顔がぼんやりとカウンターに映る。川上より頭ひとつ分は高い位置にある。

「大人しく肉を食っとけば。タイガースなんだからさあ。虎でしょ」

「先輩！ 大賀って呼んでくださいっていつてるじゃないですか」

その悲痛な声に、川上の前にいた女がクスクスと忍び笑いを漏らした。まだ早い時間でよかった。三限後の一番混雑する時間帯だったらと思うと……この男と一緒にいると、こちらが一方的に恥ずかしくなる。笑われていることにすら気が付いていない隣りの男に、非難の視線を向けた。

何ともしまりのない顔つきだ。真っ黒つぶらな瞳で低い鼻の頭が表情に合わせてぴくぴくと動く。エサのお預けをくらった愚かな大型犬のようだった。愛嬌があると言えなくもないが、常に尻尾をパタパタと動かしているような落ち着きのない男は、川上のタイプではなかった。何よりこうして場の空気を読めないのが最悪だ。隣りに並ぶと思わず見上げてしまう背の高さや、高校では水泳部だったという肉づきのよい体格は褒めてやってもいいのだが。

この男の名前は花園大賀寿（はなぞの たいがーす）という。同じ大学の同じ学部に通う一年生の後輩だ。ふざけたハンドルネームのような名前だが本名だった。いわゆるキラキラネームというやつなのだろう。

大賀と出会ったのは今年の新歓コンパで、自己紹介のおり、かたくなに下の名前を言おうとしないので逆に気になってしまった。隣りに座って問い詰めると、大賀寿（タイガース）という自分の名前が恥ずかしいのだと語った。

「おれの父さん関西出身で。野球のタイガースファンなんすよ。コワイくらいの。自分の子供にこんないい加減な名前をつけるんだもんなあ。そのまんまっしょ。ところが爺ちゃんは大の巨人ファンで。兄ちゃんの名前は巨人て書いてマサトていうんです。そんなんだから、もうプロ野球のこととなると爺ちゃんと父さんは犬猿の仲になっちゃうというか。父さんったら長男の名前を巨人にさせられたんだから意地になって、大賀寿なんて子供の迷惑をまったく考えない名前

をつけたんすよ。あ、父さんは婿養子なんで本来は爺ちゃんに頭上がんないんすけどね。ああ、自分も巨人の方がよかったなあ。せめて」

そういう問題かよ。と突っ込みたくなかったが止めておいた。ただ川上の平凡な名前に比べたら大賀寿（タイガース）にしる巨人（マサト）にしる、いくらかマシだと思う。川上は自分の名前が嫌いだ。垢ぬけない外見と同様、冴えない名前だと思う。川上晴夫なんていつの時代の名前だというのか。昭和や演歌の匂いがぷんぷんとする。だが大賀は川上の名前が好きだと言った。

「自分の名前に比べて……晴夫っていいすよねえ。ストレートっていうか。ザ名前、直球ど真ん中。晴れ男っぽくて縁起もよさそうだし」

そういう発想に川上はついて行けない。当初、でかい身体を男らしいと感じたこともあったがあまりに天然過ぎて、話せばはなすほど色気のようなものは消え失せてしまった。だがどうやら大賀は川上を気に入ったようで、次第に慕われるようになっていた。

夏休み中も「レポート教えてくださいよー！」と泣きつかれ、大賀と何度か会う機会があった。近所のファミリーレストランで食事ついでに勉強を教えてやったのだ。川上は人に物を教えるのが得意だった。教えるのが好きなわけではなかったが、別に嫌いでもない。

「フンフン、なるほど！ 何でだろ……講義ではまったく理解不能なんすけど、先輩から聞くとなぜか光のスピードで理解できちゃうっていうか。マッハの速さっていうか。やっぱ先輩はすごなあ」と大仰に肯いて見せる大賀も物分りがよく、教えがいつも確かにあった。光のスピードよりマッハの速さは、速度が落ちてるぞというツッコミはさておき。

そんなわけでそう長く会わずにいたわけでもないのだが、とはいえそれなりに久しぶりに会うのだ。挨拶もなしにいきなり肉か魚か迷いだすこの男の思考回路がよくわからない。

久しぶりの挨拶もないのか？ と聞くと、

「もう察してください……照れかくしですって」

と冗談なのか本気なのか、頬を染めて見せるのだから余計に調子が狂う。

がらんとした食堂。周囲に誰もいないど真ん中に陣取るのも居心地が悪く、端の席へ大賀と向き合うように座った。最近は大学の学食ブームとやらで学生以外も利用する者がいるが、今日はそんな一般客は見あたらない。自分もいつかそんなブームの火付け役となるような記事に携われたらいい。既に来春、出版社への就職が内定している川上は、自分が将来企画することになるだろう雑誌について思いを馳せた。タレント、スポーツ選手に有名俳優。どんな大物がその表紙を飾っているのだろうか。

「先輩が魚だから、肉にしました。やっぱり同じじゃつまんないすもんね？」

思考を遮る大賀の声。川上の皿に向けられたその明け透けな視線は、ムニエルされたサーモンをじろじろと舐めまわしていた。

「や、わけあわないよ？」

「ええ！」

本気で残念そうな声が上がった。後ろの席からまたクスクスと笑い声が聞こえた。でかいなりをして無駄に無邪気な声を上げるから余計に目立つのだ。

「……わかったから、ちょっとわけてあげるから。いちいちでっかい声を出すなって」

「わ、本当すか！　じゃあ、先輩にはトンカツの一番おいしいところをあげるんで！」

ざくざくと櫛切りにされた揚げたてのトンカツ。真ん中のひと切れを川上の皿へ移して、何が楽しいのかニコニコとしている大賀の様子を見ていたら吐くため息も底をついて、周囲の忍び笑いなどどうでもいいように思えて来た。学食のトンカツは値段の割に美味い。夏休みの不摂生で少し体重を気にして魚を選んだのだが、それすらどうでもよくなって来た。とにかく大賀という自分のペースが乱される。諦めて大賀のくれた肉厚なトンカツに食らいついた。

「なつほはいはは、はんかひーほほはりまひた？」

ほかほかの白飯を頬張りながら言うので、大賀が何をしゃべっているのか全くわからない。行儀というものをコイツは知らないのか。

「しゃべるか食うかどっちかにしなって」

「はひ、ふんまへん」

口の中の飯をごくりとやって、夏の間に関何かいいことなかったですか？　と大賀は聞いて来た。またざっくりとした質問だった。そんな都合良く景気のいい話がごろごろ転がっているわけもない。

「まあ特に」と言いかけて「や、好きなヤツができたかも……」と川上は定食の味噌汁をすすった。好きだと気が付いたと言った方が正しいか。

特に大賀に隠す必要もなかった。川上の周囲に込み入った話を聞いてくれる者は少ない。食事をしてセックスをして添い寝をしてくれる男は何人かいる。だが彼らに恋の相談をするなんて想像することも出来ない。面倒臭い奴だと思われてオシマイだ。ましてや相手が年下の高校生などと知られた日には、十代に本気になって馬鹿な奴だと鼻で笑われるのに決まっている。誰でもいいから聞いてもらいたかったのかもしれない。男とも女とも言わなければ辻褄も合うだろう。

「へえ、どんな人なんすか？」

「うーん……いまいち何を考えているかわからないんだよなあ。あいつ」

味噌汁の底に沈んでいるシジミの貝殻をすくう。無愛想で鈍感。嫌味に感じるほど冷静（クール）。源太のこと以外で熱くなっているところをついぞ見たことがない。野球だってきっと源太への下心で続けていたのに決まっている。実家は寺で将来は坊主になるというのだから実に辛気臭い。気を許すと悪口ばかりが口をつきそうになり、思わず味噌汁と一緒に言葉を飲み込んだ。

出会ってからまだ数ヶ月。川上は宗匡のことをそんなに知っているわけではなかった。そもそも宗匡は自分のことを多くは語りたがらない。最初の頃こそ源太への想いを口にしていたが、最近ではそれすら聞かなくなった。悪口なんて独り相撲もいいところだ。そんな煮詰まった味噌汁のようなしょっぱい男にはなりたくなかった。

「そっかあ。でも先輩が好きになるんだから、きっと素敵な人なんだろうなあ……」

大賀がドンブリに目を落としていた。そうだ。日に焼けてがっちりした高校球児なんてもう、完全にブランドなのだ。モテるに決まっている。だがそれだけじゃない。川上は宗匡のよいところをもっと知っていた。見た目以上のよさだって沢山あるのだ。例えば、賢くて礼儀に厚い。こちらの経験もほとんどなく、自分の価値について無自覚なので、がつがつとした下品さを感じる

ことがなかった。ときおりベッドで川上を気づかしてみせる宗匡の仕草からは、彼の優しさが伝わって来る。冷たい表情を浮かべて見せていても心の優しい男だった。隠しているだけで本当は根の熱い男なのだとも思う。深く濃い瞳の奥に静かに燃え続ける何かがあった。そんな翳りに惹かれた女にだってモテるだろう。田舎臭い自分とはまるで違う。宗匡の精悍な顔立ちを思い出して首を振った。

「まあ、そうでもないよ」

「わかります」

ドンブリから顔を上げた大賀が、モスグリーン色のお盆の両脇に手をバンとつく。立ちはだかった巨体を何事かと見上げた。

「好きな人のよさって、自分だけにしかわからないんすよね！ ムカつくところもいっぱいあるし。まったくもう！」

そうひとり納得して、音を立てて腰を下ろすと再びもりもりトンカツを食い始めた。川上は箸とお椀を宙に浮かせたまま、目の前の男を自分とは違った生物を見るように思った。コイツの思考がどうなってるのか本当にわからない。諦めて川上も再び定食に箸をつける。学食はやがて賑わいを見せはじめる。ふと目をやった窓の向こうにイワシ雲が霞んでいた。ほんの数日前に比べて急に高くなった青空が、川上に夏の終わりを告げていた。



その場面に遭遇したのは十月になってすぐ。長く続いた残暑がようやく落ちついた頃。秋というのにはまだ早いと感じる季節の変わり目だった。

大賀と一緒に夕方、人通りの多い商店街を歩いていた。美味しいコロッケを売る肉屋があるので食に行こうと誘われたのだ。穏やかな陽気にふと夕刻の肌寒さが差し込んで、川上はチノパンツのポケットに両手を突っ込んだ。

「大賀はさ、発想が中高生っぽいんだよなあ」

「そうっすかー？」

「だいたいコロッケなんてどこで食っても一緒じゃん」

コンビニエンスストアのコロッケだって割と美味しい。手軽さもあって味もよいのだからそれで十分ではないか。わざわざ電車を乗り継いで、別の町まで来ることもない。大賀の食い意地の強さには感心をしてしまう。

「何いってんすか先輩、ぜんぜん違いますよ、ぜんぜん！先輩も食ってみたらわかりますって、あそこの。もうとにかく絶品なんすから。クリーミーなジャガイモの中にわざとつぶし損ねてある部分がホクホクで。サクッと狐色にあがった衣がまた熱々で！」

でかい手足をばたつかせて説明する大賀に、ふうん、と川上は思う。そういうものを下町B級グルメというのかもしれない。雑誌の企画でウケそうな内容だ。後学のために行ってやってもいいかと思えた。息抜きにもちょうどよかった。就職の内定も決まり、卒論の準備で大学に籠もりがちだった。他の学生のように直前であたふたするのは性に合わない。ささっと卒論を終わらせて来年は人より早く卒業旅行へ出発したい。海外がいい。そうなるとバイトをして金も貯めなければいけない。親の脛をかじるのは高い大学の授業料で終わりにしたかった。

「あ、看板見えた。ほら、あの店っすよ」

早く川上に見せたいと大賀が指差した先。『モリヤ生肉店』と書かれた看板のさらに向こう。川上の視線の先で、ピンク色の風船がふわりと道行く人々の頭上に舞い上がった。幼い女の子の手からすり抜けた鮮やかな色の風船は、そのまま街路樹の枝にかろうじて引っかかった。見覚えのある風船だ。商店街の中ほどにあるスーパーの前で、とあるアニメキャラの着ぐるみが配っていたものだった。そのトナカイに似たキャラクターのグッズを川上は集めていたので、印象に残っていたのだ。

自分の身に起こったことがすぐに理解出来ないのか、女の子は茫然と枝の風船を見上げている。風が吹くたびに枝の先でゆらゆらと揺れ、危なっかしく気まぐれな様子は、茜に染まりはじめた空へそのうち飛んで行ってしまおうのではないかと思わせた。大人の身長でも届かない高さだろう。

「マジかよ。くそメンドクセー」

通りすぎる人々の波間から若い声が上がった。一度雑踏にのまれ見失った少女の姿。次に目に

したときには三人の学生に取り囲まれていた。声を上げたのは短髪の高校生で、その頭には剃り込みのラインが入っている。最近染め直したと思われる髪が、烏の羽根のように黒々としていた。制服のズボンに両手を突っ込み道に唾を吐く姿は、あまり近寄りたくないタイプの粗野な佇まいだった。

「ねえ、時間あるよね？ ほっとけないって」

三人の中では一番背の低いクリッとした学生が風船を指差す。熱心に見上げるあまり、口が半開きになっていた。

「ああ。まあ大丈夫か……琢磨の遅刻を考慮して、早く集合してるから」

三人のうちの残るひとりが袖をまくり腕時計を確認した。その姿にあっと川上の声が漏れていた。

「先輩どうしたんすか？」

問いかけて来た大賀の口を咄嗟に手で覆い、でかい凶体を引きずるようにして路地裏に連れ込んだ。人ひとりがようやく通れるぐらいの狭い路地に二人分の身体を強引に押し込む。フガフガ言う大賀に気が付いて手を離してやった。

そっと首を突き出して通りの様子をうかがう。雑踏に混じって学生たちの声を聞くことが出来た。

「なんすかどうしたんすか、事件すか？」

川上の様子を察してさすがの大賀も小声で話しかけて来る。

「や、ちょっと。会いたくないやつに会っちゃったというか……」

「へー、先輩にもそんな人がいるんすねえ。親の仇かなんかですか？」

「ちょ……いいからしゃべるでねーわ」

思わず故郷の訛りが口をついてごもごもと口ごもる。つい荒らげてしまった口調におさまりが悪い。だが大賀はシュンと大人しくなっていた。

三人の高校生。口を半開きにしていた学生が枝に引っかかった風船に向かってぴょんぴょんと懸命にジャンプをはじめた。どう考えても届くわけがない。枝の風船を取ってやるつもりなのだろうが。

「くそ～もうちょっとって気がするんだけどなあ」とジャンプを繰り返しながら「琢磨がさー、遅刻魔でよかったって感じじゃん、今日は！」とその学生が言う。琢磨と呼ばれた剃り込み頭がチッと舌打をした。

「拉致られてんだから時間を早くする意味ねえだろ。だいたい遅れるっても十分かそこらだろ？」

「遅刻魔呼ばわりするんじゃねーよ」

「万が一だよ、万が一。今日は十分だって遅れられないんだから」

「なんといっても、今日はみんなでスイーツ・ワンダーランドに行く日だからな」

腕時計の学生一一、宗匡がそう笑った。町中で遭遇するなど思ってもいなかった。そういえば彼の通う日昭高校は、この辺りの駅が最寄りだったかもしれない。川上は街路樹の下で笑っている彼の表情からただ目が離せなくなった。

（あいつ、あんな顔もできるのか……）

歳相応のあどけない笑顔だった。自分には見せたことのない表情だ。心の底から気を許した笑顔。普段、大人びて見える宗匡だが、高校三年生らしい歳相応の姿がそこにはあった。よく似た別人ではないかと改めて目を凝らしてみても、やはりその学生は宗匡に間違いない。風船の女の子と目の高さを合わせるために腰を落として「取ってあげるからね」と話しかけている。

スイーツ・ワンダーランドとは、八王子にあるケーキバイキングの店だった。一度、川上も同じゼミの女友達と一緒にいったことがあった。ケーキ以外にもパスタや唐揚げ、サンドウィッチなどの軽食もある。食べ放題の店にしては、まあまあ味の味だったのではないかな。値段もそれなりに高かったと思うが。

ジャンプを繰り返していた学生がスイーツ・ワンダーランドについて力説をはじめた。みんなで押しかけても大丈夫かと壱成が問い合わせたら予約が必要だって。九十分きっかり。遅刻した者がいても延長は不可。しっかり開始時間から食べはじめて、元をとらなきゃ損だー。そんな意気込みに溢れた男子学生の群がる店内が、戦場と化すことは想像に難くない。予約を受け入れたのは、店の英断と言っていいだろう。

「最近じゃあさー、琢磨も顔出してくれるようになったじゃん。いろいろ。なのにみんなより食べれなかったら琢磨かわいそうだし」

余計なお世話だ、と琢磨が言う。

「せっかく壱成が予約してくれたんだもん。みんなが揃うのも久しぶりじゃん。来週からは中間試験になっちゃうさー」

「何いってんだ、あ？ 文化祭でさんざん好き勝手やらかしてくれたのは誰だよ。何が球児の給仕だ……まだ先週の話だろ」と琢磨が威嚇をする。

「じゃあ、今日は打ち上げだな」

宗匡がすかさずフォローをいれた。

「だったらこんなのほっといて、さっさと行こうぜ」

「わータクマサイテー」

「人でなしだなあ」

二人の妙に息の合った波状攻撃に遭い琢磨がたじろぐ。追い討ちをかけるように、ようやく自分に起こった出来事を理解し始めたのか、今までポカンとしていた女の子がめそめそとぐずりはじめた。宗匡が大丈夫だよ、と女の子の頭に手を置く。このお兄ちゃんが取ってくれるからねー、と琢磨を指差しながら能天気な声も上がる。

「わーったよ。とりゃいいんだろ、風船。さっさと」

見たところ琢磨は三人の中で一番背が高い。と言っても宗匡とそんなに変わらないだろう。だが琢磨はヨシと屈伸をすると、宗匡に「肩車するから乗れよ」と言った。

「おい、大丈夫か？ 俺、結構重いぞ」

「源太とそんなにかわんねえだろ？ むしろ源太の方が重いだろ」

筋肉チビとなじられて、源太と呼ばれた学生が不服そうな顔をしたが、すぐに拳を上へ突き出した。

「よし、がんばるんだ、琢磨！」

琢磨の肩にまたがった宗匡が風船の紐へ手を伸ばす。後一步のところできすがに重いのかヨタヨタと琢磨の足がふらつく。

「あ、もうすこし右！」

「あともうちょっと、おいしい！」

と肩車に加わっていない源太が叫んでいた。赤く染まった木漏れ日がそんな三人のシルエットを歩道に長く映し出していた。

「誰なんすか？ あの高校生たち」

川上のすぐ真上で大賀の声がする。身をかがめるように覗いていた川上の頭上へ身体を乗り出して、大賀も通りをうかがっていた。道行く人々から怪訝な目を向けられたが、気にしていられなかった。

「ん、まあちょっとした知り合い。近所の学生」

適当な返答をする。大賀は三人の方へ異国のスパイでも見るような険しい目を向けていた。川上の敵は自分の敵だとでも言い出しそうだ。どちらかと言えば、こうして覗いている自分たちの方がスパイなわけだが。

「はい、どうぞ」

ようやく風船の紐をつかんで琢磨の肩を下りた宗匡は、女の子の小さな手にその紐を握らせた。その子はお礼も言わずバツと走り去ってしまったのだが、結局何もしていない源太が一番嬉しそうにしていた。その笑顔を見守る宗匡の表情に、言わずとも気が付かされた。

――あれが宗匡の好きな奴か。

小宮山源太。高校野球の地方予選だったか。ローカル局の放送で打席に立つ姿を見たことがあった。小柄な体躯がぶんぶんとバッドを大振りにしていて、宗匡が横で「ここはそんな大振りをかますところじゃないだろ。だから監督にどやされるんだ」とぼやきながら、食い入るようにその録画放送に見入っていた。ユニフォームとヘルメットを脱いだ源太は画面で見るとより背が高く思えたが、それ以外の印象はそう変わらなかった。その男に向けられる宗匡の穏やかな視線。川上をただじっと見つめてくるものとは明らかに違う。あたり前だ。宗匡は自分にではなくその男に恋をしているのだから。

会話の端々から川上の知らない日昭高校野球部の存在も感じられた。おそらく部員と思われる名前もちらほらと聞こえて来る。間違いなくこの三人はチームメイトだった。琢磨に見覚えはなかったが、宗匡と一緒に最後の夏を戦った仲間なのは間違いない。三人を取り囲んでいる空気が違う。住んでいる世界が自分とはまるで違う。川上が入り込む隙間など数ミリもなかった。川上と肌を重ねるときのあの荒々しい息遣いや強引な仕草の片鱗がそこには欠片もなく、あの宗匡に会いたいと強く感じた。

「ヨッシ！ じゃあスイーツワンダーランドへ、改めて出陣」

「それにしてもよー、拉致しにくんのなんで、おめーらなわけ？」

「琢磨のバイトしてるビデオ屋、俺らんちから近いじゃん」

「今日はそこのゲーセンからだろ。理由になってなくねーか」

「それだけ、顔を合わす機会が一番多いってことだな」

「琢磨の生態は謎に満ちてるからさー」

「バカ、謎に満ちてるやつがこう簡単に捕まるわけねーだろ。裕也とか考えようによっちゃ孝介の方がよっぽど謎だろ」

そんなことを話しながら、思いがけず三人がこちらへ歩いて来たので、川上はどぎまぎとした。路地の先は行き止まりの上に煩雑と粗大ごみが置かれていて、避けながら奥に逃げる時間もない。かと言え不自然に狭い路地に身を挟んだままでいるわけにもいかない。こんなぶざまな格好で「やあ」と挨拶した日には、覗いていたことがバレてしまう。

「なるべく前だけみて歩く努力ー！」

「へ？」

大賀の袖を引っ張り、通りに躍り出た。何食わぬ顔で通り過ぎるしかない。突然引っ張り出されてバランスを崩した大賀は片足を上げて踏みとどまり、状況もわからないままつぶらな瞳を点にした。

宗匡たちが横並びで歩いて来る。真ん中の源太はくるくると忙しく宗匡や琢磨の方に首を向けては、しきりに何かを話かけていた。心臓の音がバクバクとして、もう何も聞こえなかった。商店街を行く人々の雑踏が次第にボリュームを上げ、耳から入って来る雑音で頭の中がからっぽになる。

通り過ぎる瞬間。宗匡と目が合った。ピクリともしない。驚くでもない。予期せぬ遭遇に困った顔をするでもない。宗匡の表情は全く変わらなかった。だが川上を認識したはずだ。どう思われただろう。隠れて見ていたことを気付かれただろうか。一緒に歩く大賀のことを自分の恋人か何かと勘違いしただろうか。そんな風にあれこれと気をまわす自分のことを、ストーカーのようで気持ちが悪いと思った。隠れて覗き見るなんて、自分の取った行動を後悔した。恐るおそる振り返ると、琢磨がこちらに怪訝な顔を向けていた。宗匡は振り返らない。「あ？ なんだおまえら」とでも言いたげな琢磨に慌てて正面を向き直し、足早にその場を立ち去った。

「あれ、せんぱいコロッケ……」

大賀はひとりポツンと立ち止まり肉屋の看板を指差していたが、コロッケなどもうどうでもよかった。空気の読めない大賀にいつも以上の苛立ちを覚えた。

――いや、源太に似ている大賀に腹が立っていた。源太を間近で見て感じた。自分がなぜ大賀に必要以上の苛立ちを覚えるのか。大賀は似ているのだ。小宮山源太に。見た目の話ではない。そもそも野球部にしては小柄であろう源太と大柄な体躯の大賀とでは、相当な身長差があって体格も違う。顔つきも似ていない。表情や動作、醸し出す雰囲気源太を連想させるのだ。宗匡の話しに聞く源太の挙動をまるでなぞっているように感じられた。枕元で宗匡が眠そうにしながらぽつぽつと語った源太の愛しいところ。堪らなく抱きしめたくなる瞬間。そんなことを聞かされるたびに川上の心は、からからと音を立てて虚ろなものになっていくのだった。大賀に感じる苛立ちの正体は、そんな行き場のなくなった嫉妬ではないかと川上は感じていた。



あんな風に隠れたりこそこそしたりするのは、もう絶対にしないと誓ったはず――。

寝る前。布団にくるまりながら宗匡とバツタリ行き逢った夕方の出来事を思い出していた。川上に故郷の苦い記憶が蘇る。1DKのアパート。照明を消した部屋が薄ら寒く感じた。棚に飾られたトナカイのヌイグルミが若干斜めに傾いてしまっているのに気が付いたが、そのままかけ布団を引き上げる。長野の実家ではそろそろ紅葉が色づく頃だろうか。川上の太腿に走る傷痕が疼いた。

ザッ、ザッと落ち葉を踏み鳴らす音。あの頃のことを思い出すとまずその音が、耳の奥から木霊して来るのだった――。

川上は高校で新聞部の部長をしていた。部長と言っても生徒数の少ない田舎の学校で、部員は三名。二人は他の部活とかけ持ちをしていたため、必然的に川上が部長になったようなものだった。それでも記事をつくるのは楽しかった。校内で何か気を引くものがあれば、積極的に取材をして記事にした。どこかの運動部が少しでもよい成績を収めれば、インタビューをしてその感動を皆に伝えようと思った。片言でしゃべる未開拓地の原住民のような運動部員から、記事になるエピソードを引き出すのは大変な作業だったが、川上の書く校内新聞は生徒たちの評判もよく「今月の新聞よかった」「見たよー」と言ってもらえるのが嬉しくて、より頑張ろうと思った。このときの経験が、地味な容貌のわりに物怖じもせず、人に警戒心を抱かせない川上の物腰や、人にもものを教えるコツを掴むきっかけになっていた。

そんな川上が新聞部に入部して初めてインタビューをしたのが、野球部の同級生だった。こんな田舎の高校にしては珍しく中学ではほどほどに名の知れた選手だった。

「ハア、インタビュー？ 別にかまわんけど……なんかしょうしいのお」

ほっぺたをリンゴのように赤くしたのは、気恥ずかしさからなのか。グラウンドに吹き込む山間の風の冷たさからだったのか。初めて書いたインタビュー記事を新聞部の先輩に褒められ、定期的に野球部の記事を書くようになった。それが内田聡士との出会いだった。

「野球部のこと、いつもよく書いてくれて……ありがとな」

手を後ろに回してぼりぼりと搔く聡士の坊主頭。グラウンドに立つ部室棟は裏山を背にしており、授業で使う体育用具をしまう倉庫も兼ねていた。インタビューをするときにはいつもその部室まで足を運んだ。土に汚れた野球のユニフォームやワックスの染みこんだグローブの匂い。雪に濡れた白いソックス。石油ストーブの赤い灯り。そんな断片的なイメージが思い出される。

冬の間グラウンドは雪にすっかり埋もれてしまう。野球部の練習は屋内になることも多く、地味な筋トレの息抜きだとそのうち聡士は新聞部の手伝いをしてくれるようになった。日の暮れかかった校舎に雪明りが滲む。慣れない作業に四苦八苦する聡士の横顔。その真剣な表情に見惚れていた。もうその頃には聡士のことが好きなのだと自覚をしていた。

「聡ちゃんさあ、なんでうちの高校来たんだ？ 聡ちゃんくらい野球が上手かったら推薦でもっ

といいとこいけただ。冬だってよ、野球の練習がおもいっきりできるそこ」

聡士に出会えた偶然に感謝しながらそんなことを聞いたことがある。

「うーん。上手いっても上には上がいっからなあ。もちろん野球は好きだけど……それで食ってけるとかってね。俺が高校でやりたかった野球はちゃんとやれてるわ」

「ふーん……。では次期キャプテンに決まった内田さん、これから野球部をどうしていきたいね？」

「ばっ……、まさかこれインタビューか！」

慌てた聡士が音を立てて部室のベンチから立ち上がる。

「はは、じょーだんだ、じょーだん」

と川上は笑った。二年生の夏が終わろうとしていた。

学校以外でもよく二人でつるむようになっていった。町にひとつしかない駅前のカラオケボックスを頻繁に訪れて一緒に熱唱をした。それまで川上にとってカラオケは、スナックやバーで酒に酔ったおっさんが歌うものとの認識しかなかったのだが。野球部の練習が休みになる木曜は、聡士に新聞部の手伝いをしてもらった後で、カラオケボックスに繰り出すのがお決まりのコースになった。冬は雪に埋もれてしまうこの町では、他にすることもなかった。ひと冬越える頃には、自分でもびっくりするくらいカラオケが上達していた。今でもお気に入りの曲はあの頃よく聡士と競い合うように声を張り上げた、サンボマスターの『世界はそれを愛と呼ぶんだぜ』だ。

「あたらしい日々をつなぐのは、あたらしい君とぼくのなのさ～」

「ぼくらなぜか確かめあう」

「せかいはそれを愛とよぶんだぜ！」

「心の声をつなぐのが、これほど怖いモノだとは～」

「ぼくらなぜか声をあわす」

「悲しみの夜なんて……なかったかのように歌いだすんだぜ～」

狭いカラオケボックスの個室で、熱にうかされたように互いの目を交わし合った。

そうして迎えた高三の秋。すっかり親友と呼ぶ間柄になっていた聡士から「相談したいことがあるんだ」と思いつめた表情で言われた。夏の大会も終わり、キャプテンとしての勤めも果たし終えていた。聡士がやりたかった野球はこの学校で成し遂げることが出来たのだろうか。川上が新聞部として書く最後の記事は、そんな聡士のインタビューで締めくくるつもりだった。だがそれは叶わぬまま終わることになった。

聡士が野球部を引退して唯一の心残り。マネージャーをしている二年生の後輩が好きなのだと告げられた。もちろん川上は気が付いていた。隠すもなにも彼がそのマネージャーの子と話している姿を見たら、気が付かない他の奴らが鈍感なのだと思っていた。そしておそらく彼女の方も、まんざらでもないのだろうと感じていた。

「いいじゃんか、奈央ちゃんかわいいし。結婚したらいい奥さんになるだろなあ」

冗談っぽくそう言うのが精一杯だった。ついに来たか……という覚悟と笑って聡士を送り出そうと思う気持ちと。ぐちゃぐちゃと整理のつかない心情に、途中からずっと胸がばくばくと脈打って、気圧の変化があったように周囲の音が遠のいていた。焦点の定まらない視界。やたら煩い

自分の心臓。自分が何をしゃべっているのか、聡士が何を答えているのかも判然としなかった。聡士の親友として相応しいことを言わなきゃいけない。そう心がけようとした言葉がただ上滑りをして行く。「明日、告白する」と宣言をした聡士の言葉だけが耳に残った。

ザッ、ザッ、ザッー。

落ち葉を踏みつける音。冬になれば一面が真っ白に染まる学校の裏山。数十年前まで伐採場だったという山の斜面には、ひのきやカラ松が生い茂り、間伐された枯木がいたる所に横たわっている。部室の裏手へ周り込むようにしてその急な斜面へ足を踏み入れていた。放課後、聡士がマネージャーを部室の裏に連れ込む姿を見たからだった。いや、見張っていたからだった。なるべく静かにとと思うのに、落ち葉を踏む音が思いのほか大きくて、雪の降り積もる冬だったらまだよかったとムシャクシャと出処のわからない苛立ちを覚えた。雪なら雪で足を取られ、こんな容易に斜面を上ることが出来ないこともよくわかっていた。

枝を立つ鳥の羽ばたきー。

絡み合う二人の指先があった。ようやく部室裏を見下ろせる高さまで来て川上の目に映ったのは、寄り添う二人のシルエットだった。大急ぎで目を伏せた。自分はいったい何をしているのだろう。こんなことを確認してどうしようというのか。明後日の方向に視線をそむけたまま、踵を返そうとした瞬間。視界が回転をしていた。足が着くべき地を見失う。ドン！ と身体を打ちつける衝撃。口に混じった土の味。次々と全身のいたるところに鈍痛が走った。螺旋を描く空と地面に落ちて行くようだった。声も出せない。このまま死ぬのだと川上は感じた。

気が付くと回転と衝撃が止んでいた。枝葉の合間から覗く曇天の空に野鳥の声が長く響く。自分のうめき声が聞こえた。右の太腿に尋常ではない熱がある。じんじんと痺れるように次第に激しい痛みが変わって行く。足を踏み外し斜面を転落をした川上は、倒木の堅く尖った枝で太腿を深く突き刺してしまっていた。見るみる濡れそぼって行く制服のストラックス。ぼたぼたと葉に滴る血液。遠のく意識の中、事態に気付いて駆け寄って来たマネージャーの悲鳴と「おめえ、だいじょぶか！」と叫ぶ聡士の声が聞こえていた。

数日後。全身打撲と医者診断され、

「足の傷痕、たぶん残っちゃうけどねえ。それより打ちどころが悪かったら死んでたわ、きみ。あんなとこでいったい何してたの？」と呆れられた。そんな医者の言葉を反芻しながら自宅療養をする川上の元を聡士が訪れたのだった。マネージャーの奈央とつき合うことになったと告げられた。そして医者と同じように、なぜあの裏山に川上がいたのかと問い詰められた。何を言っても言い逃れる気がせずもう隠し通すのも苦しくて、覗いていたこと、そして「俺、聡ちゃんが好きだ……」と消え入りそうな声で伝えた。

耳に痛い沈黙だった。聡士は「もしかしたら、そうかと思ってたよ」と答えた。その気持ちに伝えることはできね。けれど……今までと変わらず友達だ。聡士が懸命に明るく努めようとしているのがわかって、「俺、ツライって……奈央ちゃんと幸せそうにする聡ちゃんのこと、横でずっとは見れね」とは言えなかった。ただ「うん、これからも友達だ」と嘘をついた。

その夜、通学鞆に付けてあったアニメキャラのストラップを外した。聡士と一緒にゲームセンターのUFOキャッチャーで、同じものを二つ手に入れたのだった。もうひとつは聡士が持つ

ていて、お揃いだと密かに心弾んでいた自分が恥ずかしかった。一度はゴミ箱に向けたストラップだったが、どうしても捨てることが出来ず、そっと机の引き出しにしまった。結局そのまま処分する勇気も持てないまま東京に出て来た今も、そのキャラクターのグッズを集めている――。

東京の川上の部屋。うつらうつらと記憶と現実が交差するなか、棚に飾られたトナカイのヌイグルミが、バランスを崩したまま暗闇に転がった。

朝起きるとひどい頭痛がした。寝汗でシャツが濡れそぼっている。寒気に震えが止まらない。上半身を起こそうとすると身体の節々が悲鳴を上げた。熱を測ると三十九度を超えていた。テレビゲームのゾンビさながら、ベッドから何とか這い出す。

アパート近くの個人院を訪れると受付のお姉さんから病原菌扱いをされ、他の患者から隔離をされた。鼻に長い綿棒を突き刺され、「ああ、プラスだねえ。やっぱり。うちの今年一号だよ、きみ。インフルエンザ」と医者に告げられた。高校の裏山から落ちたときに診てもらった先生にそっくりなしゃべり方をする医者だった。あの頃のことを夢うつつに思い出していたせいもあるのかもしれない。

家庭教師のバイトへ連絡し「え、もうインフルエンザ？ ホントに？」と仮病を疑われ、夜会うことになっていたセックスフレンドへメールをした。ドタキャンと思われたかもしれない。処方してもらったリレンザを吸引して、朝からずっと胸に溜まっていた熱い息をようやく吐き出した。

二、三日で発熱が治まった頃、大賀からメールがあった。

『先輩、インフルになったってホントすか！』

『なったよ』

大賀にしては珍しく返信がない。訝しく思っていると大きなスーパーのビニール袋を二つも両手にぶら下げて、その日のうちに川上のアパートを訪ねて来た。

「あのさ、俺インフルエンザなんだ。伝わってるよね？」

「はい、もうびっくりで」

「インフルエンザって熱がさがってもうつるんだよ」

「そうなんすよねー。熱がさがっても家にとじこもってるなんて地獄ですよ。たいくつだろうと思って、雑誌とかも買ってきました」

片方のビニール袋を少し上に持ち上げる。この中に入っていると言いたいのだろう。すでにコンバースのでかいスニーカーを半分ぬいで部屋に上がろうとしていた。川上は大賀の巨体を遮るようにして玄関先に立ち塞がった。

「あのさー、気持ちはうれしいよ。でも大賀にインフルエンザをうつしたくないんだって」

「ああ、おれ先輩がインフルって聞いて、予防接種うけてきたんで。大丈夫です！」

わざわざ予防接種？ や、そもそもそんなすぐ効果があるものなのか？

川上がひるんだ隙に大賀はさっさと部屋に上がり込んでしまった。このまま許してしまっているものかわからない。玄関先でため息をつく。

大賀は買って来たものをテーブルに広げてあれこれと並べはじめた。

「ホントはお粥とかつくってあげられたらいいんですけど。おれ、料理からっきしで。いっかい自分が寝込んだときにチャレンジしてみたんですけど茶色の残骸になっちゃって。米に水入れて煮るだけなのになんで上手くいかなかったのかなあ。先輩にはいつもお世話になりっぱなしだから。体力が落ちているときはビタミンCがいいらしいっすよ！」

スーパーのビニール袋から何かを取り出そうと手をつっこんだまま、こちらを振り向いた大賀の無警戒な表情に思わずドキッとす。その肩幅のあるがっちりとした体躯に男を感じていた。時計の秒針の音が耳につく。寝込む間ろくに換気もしていなかったのも、甘ったるい自分の体臭が部屋に充満していた。

めずらしく宗匡から連絡があったばかりだった。先日町で見かけたことを言及されるのかと思ったが、今週どこかで会えないか？ という短い内容だった。ベッドで荒々しく振る舞う宗匡の姿が頭の中にモヤモヤとわき出てきて、節操なく興奮する身体をひとり慰めつつ、インフルエンザなのだと断った。そんな禁欲的な生活を続けていたせいもあるのかもしれないが。

よりもよって大賀にムラムラくるなんて――。

男と二人きり。こうして部屋にいるとは言え、相手は大賀だぞ。見境なしかよ……そう思うのだが、発熱がぶり返したようにどんどん気持ちが高ぶって行く。身体が弱ると子孫繁殖能力が高まるとか。女性を好きになることの出来ない自分には、子孫繁殖など関係ないか。などとあれこれ考えてみるが気は散ってくれない。

部屋の空気が色を変えていた。無言で近付いて来る川上の様子に、大賀は笑顔のままハテナマークを浮かべた。まずはそっと触れてみて……と思っていた段取りもどこへやら。いざその無防備な表情を間近に見た途端、強引にベッドへ押し倒していた。自分より大きな身体があっけなく転がる。馬乗りになって両手で肩を押さえ込んだ。

「わ、ちょっと先輩、なんすか！」

そこまでされてようやく大賀から血相を変えた声が上がった。もうままよ、と自分のズボンに手をかける。抵抗する大賀の肘を胸で押さえつける。その首筋に口を寄せた。大賀の青い体臭が鼻をくすぐり川上の熱い息がこもる。「ん……」と声が漏れた。もみ合い、大賀のスウェットからはみ出た白いTシャツの裾をトレーナーごと捲り上げた。張りのよい肌があらわになる。水泳で鍛えた綺麗な筋肉が目飛び込んで来た。触れると手のひらに吸い付くような弾力だった。川上の下半身がグツといきり立つ。締まりのよい腹筋へそのまま顔を埋めしゃぶりついた。身をよじった大賀から「ひゃ……」と声が上がった。腹から胸へかけて手を滑らせ、湿る肌の香りに胸を膨らませた。まさぐる手のひらが胸の突起に触れる。川上の下で何かびくんと跳ね上がった。別の生物のように硬く震える熱い何か――。

びっくりして上体を起こした。馬乗りになった川上の下で大賀は激しく興奮をしていた。隆起するスウェットズボンの生地。気付くと川上の乱れた呼吸に大賀の息遣いが重なっていた。抵抗していたはずが、川上の動きに合わせてその身体を許していた。そうでなければ体格差のある大賀を簡単に組み伏せることなど出来なかった。

大賀は自身のやり場のない下半身とは裏腹に、捨て犬同然の目で川上を見上げていた。川上は悟った。コイツもこっち側の人間だ。男が好きなんだ――。そう気付いた途端、なぜか水を差

されたように身体のうちには溢れる熱が冷めて行った。

うなだれ、背を向ける。この数日シャワーも浴びずにいた自分の身体から饅えた男の臭いがした。最悪だった。

「もう、帰れば……」

背後の大賀を見れなかった。返答はない。だが、やがて物音とともに大賀がアパートを出て行くのがわかった。立てつけの悪い扉が、ガタン！ と大きな音を立てた。その拍子に買って来てくれたスーパーのビニール袋から、ころりと黄色い物体が転がり出た。

「――いくらビタミンCがいいからって、まるごとレモンはねーって」

艶やかに光るレモンを手に取り、誰もいなくなった部屋でぽつりとツッコミを入れていた。

★

インフルエンザの一件から大賀に避けられるようになっていた。キャンパスで姿を見かけても気まずそうに目をそらされた。それも仕方がないことだった。

今考えればなぜあんなことをしたのか。大賀も男が好きなのだとは初めから知っていたのならともかく。ストレートだと思っていた男を相手に普通であれば考えられない行動をしてしまった。禁欲的な生活、人肌恋しかった、魔が差した。言い訳はいくらでも思いつくけれど――。

もしかしたらどこか源太を彷彿とさせる大賀を前に、宗匡へあてつけたかったのかもしれない。そんなことをしたところで宗匡の知るところでは全くないし、大賀にとってもいい迷惑以外の何ものでもない。自分を無条件に慕ってくれる後輩に甘えていただけだった。

夏の終わりから次第に宗匡からの連絡も途絶えがちになっていた。インフルエンザで誘いを断ってからさらに拍車がかかったようにも思う。こちらからメールを送っても反応が鈍い。既読スルーされることも頻繁だった。メールでしつこくしないをモットーにしている川上は、ただ宗匡からの連絡を待つことしか出来なかった。

試しに冗談っぽくハートのアイコンを文末に付けて見たこともある。だが宗匡の返信はいつも用件を伝えるだけ。ハートの気持ちは放置され、余計なことをしなければよかったと後悔をした。川上は宗匡のことが好きで。宗匡は源太が好きで。俺って底辺だなあと、どんどん鬱屈して行く。

恋ってのはね、叶わない約束に何度も耐え忍ぶこと。たった一回のキスに何度も夢を見てしまうこと。鳴らないメールの着信音を待つこと。夜、寝る前に「不安な気持ちに負けないように」といろいろ理論武装したはずのものが、朝起きた途端に完全無防備、丸裸の自分に愕然とすること。そんなことを情事後のピロートークで滔々と語るセックスフレンドをずいぶんとガリーな男だと川上は思う。そんな男に恋の相談をしたところでまともなアドバイスを期待出来ない。だが可愛いトナカイキャラのグッズを集め部屋に飾っている自分も、宗匡からはずいぶんと少女趣味に思われているのだろう。

大賀と無駄口をたたかなくなり気が付くと、自分の身の回りにはセックスフレンドしかいない。その男たちとも会う気が起きなかった。町にコロッケを食いに行ったり、ファミリーレストランで勉強を教えてやったり。そういうことがバイトに明け暮れ、卒論や宗匡のことで悶々とする自分にとっていかに気晴らしになっていたのか。今さら思い知った。卒論に必要な資料をめくる手を止め、川上は音のない息をついた。

ずいぶんと久しぶりに宗匡がアパートを訪れたのは十二月。クリスマスや年末の雰囲気町が浮足立ちはじめた日曜の午後だった。

川上が湯気の立つ二人分のマグカップを手に部屋へ戻ると、ベッドを背にした宗匡がリモコンをテレビへ向けていた。ぷつと音を立てて、部屋にテレビの音声が響きはじめる。野球のデ

イゲームの放映だった。録画放送かもしれない。日本シリーズはもうとっくに終わっているはずだから何かの友好試合だろうか。選手や球児に目が行くことはあっても野球そのものに興味がない川上には、このテレビの試合がプロ野球以外の何であるのかはわからなかった。日本シリーズの終了ですらビールをかけ合うニュースの映像で「ああ、今年もおわったのか」と知るほどであった。

熱いマグカップをローテーブルに置き、宗匡の隣に腰を下ろす。床に脱ぎっぱなしの赤いダウンジャケットの脇で、宗匡の指に川上の手のひらが触れた。体温を感じる。久しぶりに間近で見る宗匡は相変わらずの坊主頭だった。野球部の連中は引退をすると髪を伸ばしたがるといって、寺の息子ではそうも行かないのだろう。

「ねえ、川上さん」

テレビの試合に目を向けながら宗匡が言う。

「ん？」

「もう、川上さんとは会えないよ」

「……うん」

そういう話をしに来たのだろうとはわかっていた。宗匡の言い方がまるで「今日の夕飯、何にする？」くらいの自然なものだったので、川上も素直に肯いてしまっていた。夕飯に誘われたことなど今まで一度もなかったのだが。テレビの野球中継は特に盛り上がりも見せず、デイゲームらしい淡々さで進んで行く。

「俺、もう少しだけ……大学でも源太と野球をつづけようって決めたんで。アイツも一緒の大学行くために、すげえ勉強してくれてて。俺もその気持ちに応えたくて」

宗匡の思い詰めた声が告げたのは、最後の最後まで源太のことだった。

「よくわかんないな一、それ。理由になってくかない？」

川上の投げやりな言い方に、めずらしく宗匡が困った顔をする。

「源太くんのごことは、俺には関係ないでしょ？ もう飽きた、ていってくればそれでいいよ。宗匡も律儀だね一。セフレにわざわざ別れ話なんかしなくてもいいのに」

言葉が勝手に口をついた。今まで言わずに飲み込んで来た言葉ばかりだった。

「でも一一」

と宗匡がそんな川上を遮る。

「川上さんが俺のこと、真剣に思ってくれてるの……何となくわかっちゃったから」

「あ」と言うときの形で川上の口が固まる。出しかけていた言葉を失う。

「俺、川上さんは勝手に大丈夫な人なんだって思ってて。でも、俺、川上さんのそういうところに救われてた」

テーブルに置かれたマグカップ。側面に描かれたトナカイのキャラクターが大きく白い歯をむき出しにしてピースサインを見せていた。声を出せないまま床につく宗匡の指先から、そっと自分の手のひらを離した。

白々と響くテレビの野球中継が気まずい沈黙を埋める。ぱらぱらとした歓声がスピーカーから上がった。液晶テレビの画面いっぱい、薄曇りの空が映し出される。球場に打ち上がった硬球が

空の霞に消えて行く。今まで盛り上がりのなかったデイゲームに突如、ぽつりと打ち上がったホームランだった。

あの日、夏の日に。このアパートの部屋で宗匡と見た高校野球を思い出した。あの日も甲子園の空にホームランが打ち上がったのだった。カキーンと金属音を響かせて、清々しく青空に吸い込まれて行く真っ白なボール。投手が見せる苦々しい表情と、顎から滴り落ちた汗。ダイヤモンドを悠々と回って行く球児が掲げた拳。その瞬間、甲子園球場の全てのものに太陽がキラキラと照りつけ、応援団と生徒たちの歓声が夏の球場を盛大に賑わせていた。

『宗匡ってホームラン打ったことある？』

『あるよ、一応』

『ふうん。ホームランって気持ちいいんだろなあ』

そう問いかけた自分の言葉に、あのとき宗匡は何と答えていただろうか。宗匡がどう答えたのか思い出すことが出来ない。だが、それが自分と宗匡の関係についての答えであるように思えた。

「野球をやっているときの宗匡、かっこよかったよなあ」

テレビの歓声がひと段落した頃、川上の肩から力が抜けた。

いつかローカル局の放送で観た日昭のユニフォームを着た宗匡の勇士が頭によぎる。応援曲はブルーハーツの『トレイン、トレイン』だった。

トレイン、トレイン、走ってゆけ、

トレイン、トレイン、どこまでもー。

そんな応援曲をあてがわれた寺の息子は将来、ずいぶんファンキーな坊主になることだろう。宗匡はこの先、どこまで走って行けるのだろうか。それを見届けることは自分には出来ないのだ。

「それ、前にもいわれたことあったな、川上さんに。ユニフォーム姿がカッコイイってさ」

「そうだった？」

隣の宗匡に首を向ける。照れた笑いを浮かべていた。女の子に風船を取ってあげていたときの顔つきと近い。そんな面差しを自分にだって見せてくれていた。聡士の片影ばかりを探して宗匡のことをちゃんと見れていなかったのは、自分の方だったのかもしれない。目の前にいるのは高校三年生の十八歳、吉田宗匡だった。

「川上さんは、高校球児だったら誰でもいいんじゃない？」

「そうそう、あのいいカラダにだかれてー、て」

川上も笑った。

「俺、川上さんでよかった」

「ん？ 何が」

「はじめての人が。いろいろ教えてもらって感謝してます」

そう坊主頭を下げる宗匡にいつまでも格好のいい高校球児でいて欲しくて、川上は笑顔のまま「俺もよかったかも」と答えた。



宗匡が帰ってしまったアパートの部屋は急に寒々しく感じられて、あてもなく川上は外出をした。もう二度と宗匡がこの部屋を訪れることはないのだろう。靴を履こうと玄関先で振り返った自分の部屋は、どこかよそよそしい雰囲気漂っていた。まるで引っ越して来たばかりの部屋のようにだった。床と天井だけの何もない空間。窓に四角く切り取られた灰色の空。四年前、上京に合わせてこの部屋へ引っ越して来たときのことを思い返す。立てつけの悪いアパートの扉が川上の背後で音を立てて閉まった。

北風が吹き寄せて来る。ダッフルコートのポケットにかじかむ手を突っ込み、肩をいからせるようにして身を縮めた。さてどこへ向かうかと路上に立ち止まる。ポケットの中の携帯電話を無意識に握りしめていた。

思い立って携帯電話を取り出すと、宗匡のアドレスへ短いメールを打ち込んでいた。勢いに任せて送信しようとする指がためらう。

また会いたい――。

そんな未練がましいメールを送り付けて、いったいどうしようというのか。思いつきに膨らんでいた胸が急に萎んでいく。寒さに凍えた息をつく。こんなもの本文ごと削除してしまった方がいい。

すぐ近くから「おい」と声をかけられて、川上の肩がピクリと跳ね上がった。目の前に短髪の男が立ちはだかっていた。見覚えがあった。宗匡の元チームメイトで、宗匡や源太と一緒に町で見かけた琢磨だった。それでなくても悪い目つきをさらに尖らせ、噛みつきそうな相貌でこちらを睨んでいた。こうしてアパートの前にいるのだから、どこで知ったのかはわからないが自分と宗匡に面識があるとわかってのことだろう。宗匡以外に、自分とこの男の接点は思いあたらない。

手にした携帯電話を慌ててコートのポケットに突っ込む。何かを咎められた気分だった。川上はぶっきらぼうに言った。

「何、なんか用？」

「おまえ……誰だかしらねえけど。あんま宗匡に近づくな」

「はあ？ なんだそれ」

黙して語らない。一方的に自分の用件だけを叩きつける態度にカチンと来た。普段なら君子危うきに近寄らずを實踐している川上だが、今日ばかりは無性に腹が立った。コイツは自分と宗匡のいったい何を知っているというのか。とやかく言われる筋合いはない。自分と宗匡の道ならぬ関係に気付いたとでも言いたいのか。こういう粗野な奴にありがちな動物的な勘が働いているのかもしれない。それならそれでコイツにわからせてやったっていい。宗匡も望んだ関係だったということ。どういう了見なのかと琢磨の様子をうかがう。

「おまえ、立川の商店街で俺たちのこと覗いてただろ？ 何かわかんねーけど……きなくせえん

だよ」

琢磨が道端に唾を吐いた。眉を寄せる。あのとき町で風船を取る様子をうかがっていたことがこの男にはバレていた。それは仕方のないことだが、琢磨の口ぶりに引っかかりを感じた。もしかしたら軽く犯罪めいたことでも想像しているのかもしれない。恐喝、クスリに、ネズミ講……。川上も大学の知り合いから、さりげない会話の中で巧妙に貯金額を聞かれ、「その貯金が何倍にもなるオイシイ話があるんだけど」と持ちかけられたことがある。そんなものまず間違いなくオイシイわけがない。物騒な話だった。

琢磨が何か勘違いをしている可能性は高い。今日、自分に別れを告げに来た宗匡がどんな思いつめた表情で道中を歩いていたかはわからないが。きっとこの男は様子のおかしな宗匡を見かけ、その跡をつけて来たのだろう。

「たぶん、会うのは今日で最後だったと思う。きみの方こそ、そっとしておいてあげたら。宗匡のこと。そういうのお節介だよね」

「もとからかまう気はねーよ……」

ジロリと向けられていた琢磨の目から、少し勢いがなくなる。

「ふーん。だったらいいけどさー。あんまり嗅ぎまわるようなことすると、きみが後悔するんじゃない？」

宗匡が同性愛者だと知ったら。しかもチームメイトのひとりに片想いをしているのだと知ったら。この琢磨という男のような者が一番嫌悪感を抱くに決まっていた。

「はあ？ どういう意味だそれ」

「宗匡の闇は深いよ」

鈍感な男を前にからかいたくなかった。肩をすくめて、わざと意味深な言い方をしてやる。琢磨はポカンと間の抜けた顔をした。煙に巻かれた様子にイイ気味だと心の中で舌を出してやった。

「――そんなもん、だれの闇だってふけーだろ？ あいつが破戒僧になろうがどうしようが……いちいちかまってられるかって。あいつの決めたことなら、俺には関係ねえ」

そう吐き捨てて、こちらに背を向けた。琢磨の返答に今度は川上があっけにと取られていた。もう宗匡は来ないと聞いて、取りあえず納得をしたのか。言いたいことだけを言いそのまま立ち去ろうとする琢磨に、モヤモヤと煮え切らない想いがわき立つ。

何だよ……関係ないとかいいながら、心配だからここまで来たくせに。言い負かされたようで納得がいかなかった。一步踏み出し、その背を呼び止めようとする。

買い物帰りの近所のおばちゃんを通りがかる。頭に剃り込みラインの入った琢磨を見て、大きめに道の端まで避けて見せた。あからさまな態度だ。物騒なものを見る目つきで「いやね」とひとりごちている。不良とでも思ったのだろう。琢磨はそんなおばさんへ一瞥をくれて、通り過ぎていく。

川上は「こんにちは」と声をかけられた。アパートの裏に住む顔見知りのおばさんだった。長野の実家から送られて来た大量の米やら野菜に困って、おすそ分けをしたことがあった。川上の素朴な外見と人当たりのよい物腰は、年配の女性が安心して接しやすい人柄なのだろう。以来、挨拶を交わす仲になっていた。

「あ……こんにちは」

「今晚は寒くなるそうですよ、ねえ」

川上は愛想笑いを浮かべた。そのままにこやかに立ち去って行くおばさんに、ほっと白い息をつく。琢磨と話しているところは、見られていなかったのだろう。こんなご近所の気安さは、田舎育ちの川上にとって人心地のつく思いだったが、それゆえ変な噂が立つのも気まずい。男を連れ込む姿はただの友達と見えてくれているだろうが。それだってあまり歳の差を感じる時には、気をつかっていた。

おばさんに気を取られている際に琢磨の姿を見失う。川上の口から再び上がる白い嘆息。ダッフルコートの襟元を片手で押さえつけ、かげり始めた日の冷たさに吐いた息をその手にあてた。じわりと凍えた手に熱が広がる。

『気持ちいいよ。セックスなんかよりずっと』

ふと、声が聞こえたような気がして、川上は自分のアパートを振り返った。思い出した。あのとき、自分の部屋で甲子園の中継を見ながら、ホームランを打てたら気持ちがいいだろうと何気なくつぶやいた言葉に、肯いた宗匡が何と答えたのかを。ホームランは気持ちがいいのだ。セックスなんかよりずっと――。

関係がなかった。そう思い知った。頭に剃り込みのラインがあろうが。男が好きだろうと、誰に片想いをしていようと。皆それぞれの道を歩くものが交差する場所がたまたまニッショー野球部ただだけで。野球を愛し、共に甲子園を目指した若者たちが自然と肩を並べただけで。川上が余計な心配をするまでもなく、宗匡がニッショー野球部である事実は変わりようがなかった。

★

「で、大賀は野球をやろうとか思わなかったんだ？」

「ぜんぜん」

大きな体躯に不釣り合いなハニカミを浮かべて大賀は言う。

「逆に親の姿にひいちゃったんすよねー。野球に関心の持てない身体に生まれ育ったといえますか。爺ちゃんと父さんの巨人VS阪神の攻防はそれだけすごかったんすよ。どっちの味方をしていいのかわからなかったというのもあるかなあ。どんどん野球から関心がはなれちゃって」

駅前のハンバーガーショップに大賀を呼び出し、成り行きで家族の話になっていた。

「わ、マジでござりっすか、あざっす！」とインフルエンザの一件など何もなかったかのように大賀は振舞っていたが、一生懸命、気まずい部分に触れないようにしているのがまるわかりだった。そんな健気な大賀を前に、ハンバーガーのひとつも奢ってやらなければすまない気持ちにさせられた。

今夜から年に何度もないくらいの強烈な寒波が日本列島を覆います。クリスマスには、もしかしたら雪が舞うかもしれませんよ。そうニュースの天気予報が言っていたように、次第に冷え込みも増して行く。ひとり年末の浮足立った町並みにいるのが、どうしても耐えられなかった。こんな心境でもなければ、今になって大賀に連絡を取ろうとはしなかっただろう。ずいぶんと久しぶりのメールに、返信がなくてもしょうがないと思っていたのだが、こうして顔を突き合わせている。呼び出したものの特にすることもなく、大賀の家族のことを聞いたりしていたのだった。元新聞部で聞き上手の川上を相手に、大賀はずっとしゃべり続けていた。

野球をはじめた大賀の兄はエースでキャプテン。爺ちゃんからも父からも可愛がられ、何かにつけ優秀な兄と比べられた。でも兄のことは大好きだ、と大賀は言う。巨人と大賀寿。兄の名前の方がよかったと笑顔で語る大賀から、兄の巨人に劣等感を持っているのが感じられた。野球への関心を持たないようにしているのも、本当はそんな兄と比較されないようにしたかったのかもしれない。

川上も野球そのものに興味はなかったが、何かと縁がある人生だと今思えば気付かされる。好きだった同級生――聡士のおかげで、ルールぐらいはちゃんと把握しているし、宗匡との出会いも然り。こうしてタイガースと名付けられた男とだっぴ一緒にハンバーガーを食っている。大賀は会話の合間で息をつくように、トマトやアボガドが何段にも積み上がったアメリカンサイズのハンバーガーへ大口を開けて食らいついていた。

「そうだ。先輩、おひまだったら最後詣（さいごもうで）でいかないっすか？」

急に思いつきましたと、大賀が口の端にはみ出したケチャップを親指ですくいながら言う。

「何だそれ？」

「やー、初詣は先輩きっと忙しいだろうし。混んでるし。今年最後のおまいりってことで」

またいつものついて行きかねる発想だった。だが寺の息子にふられた男が神社にお参りに行く

のもよいのではないかと思えた。店内に流れる陽気にアレンジされたクリスマスソング。そのリズムに合わせて、氷で薄まってしまった炭酸ジュースをひと息にストローで吸い上げた。

町外れの小高い山には、ご利益があるのかないのかよくわからないさびれた神社があった。色の剥げかけた朱色の小さな鳥居から、山頂の境内へ長い石段が伸びている。こうして訪れるのは初めてだった。苔に滑ってしまわないよう川上は慎重に急な階段を踏みつけた。

鳥居をくぐる際、大賀が背筋を伸ばして深々と頭を下げて見せた。

「何やってんの？」

首を傾げる。

「何って……挨拶に決まってるじゃないすか。神様に。あ、先輩もちゃんとしてください。最後詣でなんすから」

言われるままぎこちなく礼をする。我ながら心がこもっていない。

「神様ってあんまり好きじゃないんだよなあ」

腰に手をあてて、ぐっと背筋を伸ばした。神に頼んで何かが叶ったことなど自分の人生にあったらどうか。

「でも日本の神様っていいすよね、たくさんいて。八百万（やおよろず）の神っていうから、八百万もいるんですよ。そんだけいたら、きっと先輩の好きな神様もいますって」

まるで星の数ほど男はいるのだから、と失恋を慰められている気分だった。

「まえから聞こうと思ってたんだけどさ」

「はい、なんすか」

「大賀って、俺のこと好きなわけ？」

みるみる大賀の顔が紅潮して行く。

「な、な、な、何いってんすか！ だって先輩には好きな人がいて。おれのこともしっかりタイプじゃないし。そんなんじゃないんすよ。ぜんぜん違いますって！」

「――俺、ふられたんだよね。その好きな人に」

こんなことを打ち明けて、どうしようというのか。また甘えようとしていた。

大賀は一度口を閉ざし、足もとに目を落とした。

「先輩の好きな人って、まえに風船取ってた高校生ですよ」

「なんだ……バレてたのか」

「そりゃわかりますよー。先輩のことは何でも。先輩ったら、あの高校生のことばかり見てたし」

「ごめん」

川上は頭を下げた。鳥居をくぐる時と違って、自然と頭が下がっていた。

「今度はなんなんすか、急に」

大賀が慌てて、意味もなく両手を上げる。

「俺の部屋に来たとき、なんか強引なことしちゃったから」

「や……あのときは、あの……おれも勝手にカラダが反応しちゃって……先輩にはずかしいとこ

見られちゃったっていうか」

下半身の辺りをモジモジとさせる。大賀の頭から湯気が立ち上っているように思えた。

「なんだよ……そんなこと気にしてたんだ？」

「そりゃ、気にしますって」

大きな身体を縮込ませる。そんな素振りに思わず、ぷっと噴出してしまった。避けられていたのはそんな理由だったのかと脱力しながら、どこかホッとしていた。

「俺、病みあがりでムラムラしてたんだよなあ……言い訳になってないけどさ」

「でも、先輩やっぱりおれじゃダメだったんすよね……。どっちかっていうとおれ攻める方なんで、あのとき、上手くできなかったし」

ほへ、と奇妙な声が漏れる。

「大賀が攻める？ や、まさかって。いやいや、そういうことじゃなくてさ。ストレートだと思ってた男に突然、襲われるとは思ってなかったわけじゃん？」

「え？ 誰がストレートなんすか？」

目をぱちくりする大賀に、川上は自分の顔へ指を向けた。

「まさかー。先輩がこっちだったのは、最初っからバレバレすけど」

「は、どこがだよ！ こっちっぽくないですね、ていつもいわれるのに……」

「ナイナイ」

と爆笑する大賀にムツとしてデコピンを食らわせた。避ければいいものを大賀は大人しく目をぎゅっとつぶって「いてー」と声を上げた。

相変わらずな奴だと思う。大賀は、やはり大賀寿で他の誰でもない。源太に似ていると思った。だがそれは勝手な思い込みであって、そもそも本物の源太のことだって自分はよく知らないのだ。

「うーん……俺って、そんなにこっちっぽいのかなあ……？」

「やー、どうっすかねえ。おれにはわかったってだけで。なんていうか、川上先輩は、川上先輩っぽいです」

そう笑う大賀。牙の折れた虎のような男だけれど、それがこの男の好いところでもあった。

日が沈みはじめた。辺りにひと気はない。雑木林がざわざわと風に音を立てていた。

普段から運動不足気味の川上は、延々と続く急な石段に、次第に息切れをはじめていた。身体も重い。ふくらはぎの筋肉がオーバーヒート寸前だった。頂上の境内へ恨めしい目を向けた。あとひと息。だがそのひと息が長い。一方で息も乱さず飄々としている大賀に、元水泳部と新聞部の格差を見せつけられていた。足を休め、ふうと息をつく。カラスの子がおうちに帰ろうと鳴いていた。

メールの着信を知らせるメロディが流れて、思わずコートのポケットを手のひらで押さえつけていた。そんなことをしたって、鳴るのを止めることは出来ないのだが。宗匡からのメールが届いたことを知らせる着メロだった。もう二度と宗匡から連絡が来ることはないはずだった。ちらっと大賀の様子をうかがってみる。手の指がポケットの上から携帯電話のカタチを無意識に探っ

ていた。

「えいこーにむかってはしる、あの列車にのっていこおー」

急に口ずさみはじめた大賀に、え？　と思う。

「その着メロ、ブルーハーツすよね。兄貴が好きで。おれもよく聞いてました。苦しいときは、勢いのある歌をうたうのがいいんすよねー。おれ部活の練習で苦しいときは、いつも歌いながら泳いでたなあ」

歌いながら泳ぐという器用なのか奇妙なのかよくわからない状況が全く想像が出来なかったが

、

「はだしのままで飛びだしてー、あの列車にのっていこおー」

とバカでかく調子を外した大賀の歌声に不安な響きが滲んでいた。落ち着きのなくなった自分の様子を明らかに勘づかれていた。

川上と足並を揃えていた大賀が先へ歩を進める。鼻歌を口にしながらどんどん石段をのぼって行ってしまふ。メールが届いたことに気をつかわれたのかもしれない。

コートから携帯電話を取り出すと、川上は素早く届いたメールをチェックした。

大賀の鼻歌は続いていく。

「ここは天国じゃないんだー、かといって地獄でもないー。いいやつばかりじゃないけどお、悪いやつばかりでもないー。見えない自由がほしくてー、見えない銃をうちまくるー、本当の声をきかせておくれよ、じゃーんじゃんじゃん、じゃんじゃんじゃんじゃん……トレイン、トレイン、走ってゆけえー、トレイン、トレイン、どこまーでもー。トレイン、トレイン、走ってゆけえー、トレイン、トレイン、どこまーでもー」

川上は目を閉じると、そのまま携帯電話をポケットにしまった。大賀に追いつこうと、歩を速める。

「ああ、なんかカラオケいきたくないっすか？　お参りのあとで」

川上の様子には触れずに、大賀はただ明るい声でそう聞い来た。久しぶりにカラオケに行って、声を張り上げるのも確かにいいかもしれない。賛同を示すと「やった！」と素直な声が上がった。

「楽しみだなあ。先輩はどんな歌をうたうんすか？　カラオケで」

「うーん、まあいろいろだなあ……」

故郷の町でカラオケボックスに通った日々。カラオケに行けば、どうしたって聡士のことを思い出すに決まっていた。東京へ出て、聡士のことを忘れようと誓ったあの冬。受験の下調べのために初めて都内にやって来た。ちょうど今くらいの時期だったと思う。シティホテルから見た都会のネオンに心細さを感じた。あれから四年。宗匡に聡士の姿を重ね。変わったと思ったものは何も変わっていなかった。移り行く東京の景色に、いつまでも立ち止ったままでいた。

『落ち着いたら、また会わない？』

送り損ねたと思っていた宗匡へのメールは、いつの間にか送信済みになっていた。琢磨と遭遇して、慌ててポケットへ突っ込んだときに、送信ボタンを押してしまったのかもしれない。

『俺でよかったら。今度は飯でも食いにいきましょう』

そう宗匡から返信があったのだった。初めて飯に誘われたな、と苦笑いがこぼれた。しばらく会うことはないのだろう。だけどいつかまた会えるのだから、宗匡を好きになってよかったのだと思えた。

ふと気が付くと隣に大賀がいない。背後から声がかかった。

「先輩、うしろ……スゴイっすよ！」

大賀に言われ振り返ると、見事な夕焼けが町を染めていた。

茜と藍色のコントラスト。色彩が目には迫る。階段のある山の斜面は、西側に広がる町並みがよく見渡せた。四年も住んでいて、自分の住む町の全景をこうして目のあたりにするのは不思議な気分だった。寒波の影響で北から吹き寄せる強い風と、揺れるようにして沈みゆく火輪が、澄み渡った空を真っ赤に燃え立たせていた。夕陽に炙り出された町並みが、強い陰影を織りなしている。思わず感嘆の息が漏れた。いつぶりだろう。こんな風に景色を美しいと感じるのは。

「へへ、実はこの夕焼けを見せたかったんすよねー。先輩に」

照れた笑いを浮かべ、大賀は暮れゆく景色に目を細めた。

「おれ、高いところが好きで。空に近いところって気分がうおーてなるじゃないですか。この場所もいろいろ落ち込んでたときに見つけて。でも……今日の夕焼けはまたスゴいなあ。今まで見たことないすよ、こんなの」

夕闇に沈む直前。茜の町は人の営みで息づいていた。駅前の雑踏、行き交う人波。年末の浮足立った町の景色に、家路を急ぐ者達の姿。雑居ビルの看板や商店街のネオン、マンションに灯り始めた部屋の明かり。そこに住む人々。皆きっと同じようなことで悩んで、誰しも同じようなことを繰り返して、それでも毎日続けている。

「――世界はそれを愛と呼ぶんだぜ」

「へ？」

「サンボマスターだよ。カラオケでよく歌う」

「ああ、そっか。もう……びっくりした。まぎらわしいこといわないでくださいって」

「まぎらわしい？」

「だって……ほら、告白されたかと思っちゃいますよ。そんなの」

川上は曖昧に肩をすくめて見せた。

大賀がひと息に階段を駆け上がって来る。先輩のサンボマスター楽しみっす！ と顔をほころばせて。階段の段差が大賀との身長差を縮め、川上と同じ高さにその瞳があった。

自分の住む町を改めて見渡す。町に夕刻を知らせるチャイムの音が響きはじめていた。見上げれば誰の目にも等しくこの空が映るのだろう。川上の歩いて来た暗がりにもその夕陽はそっと差し込む。赤く染まる石段。川上はこぼれ落ちた涙を悟られないように、のぼる階段を大賀より一歩先に出た。

note

《作中引用》

『世界はそれを愛と呼ぶんだぜ』サンボマスター 2005年

『TRAIN-TRAIN』THE BLUE HEARTS 1988年（2002年再発）

この作品は、Amazon Kindleで発売中の電子書籍『ナインストーリーズ-球児九人夏物語-』（著：晋太郎さん）の二次創作作品です。

夕焼ドロップス spinoff from ナインストーリーズ -球児九人夏物語-

<http://p.booklog.jp/book/96851>

著者：なかば

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/nkb-nakaba/profile>

Amazon 著者ページ：<http://www.amazon.co.jp/なかば/e/B00LJHWE98/>

Amazon kindle で電子書籍販売中です。

原作： ナインストーリーズ -球児九人夏物語- sideA、sideB

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DSQV6E2/>

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DSR18XA/>

表紙写真 素材提供：Krasava@GATAG

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/96851>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/96851>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ